

# 田中三也さん

1923(大正12)年11月25日生

## 海軍

- ① 1939(昭和14)年10月、甲種飛行予科練習生に志願(第5期生)
- ② 1942(昭和17)年7月、重巡洋艦「利根」に配属  
偵察員として南太平洋海戦に参加(零式水上偵察機)
- ③ 1943(昭和18)年 特修科偵察術練習生の教育
- ④ 1944(昭和19)年1月 第151海軍航空隊でトラック島へ
- ⑤ 同年5月 あ号作戦挺身偵察 ツラギ、アドミラルティ方面の挺身偵察に成功し、連合艦隊司令長官から個人感状を授与される(二式艦上偵察機)  
↓↓↓本資料は以下について記載しています↓↓↓
- ⑥ [1944\(昭和19\)年10月 第141海軍航空隊偵察第4飛行隊の編成、](#)  
・同年10月 [フィリピンへ進出、同期の特攻を見送る](#)  
・翌年1月 [米軍上陸し基地撤収、ルソン島北端のアパリへの転進、特攻を命ぜられる](#)
- ⑦ [1945\(昭和20\)年2月 第343海軍航空隊で愛媛県・松山基地に\(彩雲\)](#)  
・同年4月 [第171海軍航空隊で鹿児島県・鹿屋基地に、沖縄方面の偵察](#)



## ⑥ 第141海軍航空隊 偵察第四飛行隊の編成

- ・ 1944(昭和19)年5月ころには、ソロモン諸島方面の日本軍はほとんど孤立状態に陥り、敵軍の矛先は内南洋方面に向けられてきた。6月にはいり、B25やB26といった中型爆撃機によるトラック諸島への空襲は日増しに激しくなった。飛行場のある竹島と春島への爆撃は激しく、補給施設や宿舎にも被害が出た。攻撃機も偵察機も飛び立っていたまま多くが帰ってこなかった。トラック島の艦隊泊地は1年前の華やかさは全くなく、マストだけの沈没船が所々に見える。食料補給は潜水艦に頼るようになっていた。
- ・ 6月20日、飛行機の保有ゼロに陥った151空偵察隊は、飛行機を補充するため内地に人員を送ることになった。潜水艦に便乗するので、グアム島付近の敵との交戦は当然ある。「空で散るか」「海底深く眠るか」で夕食後に話に花が咲き、こっくりさんの占いも始まった。翌日、隊長から帰還者の発表があった。自分も選ばれ、残留者と互いの武運の一日も長いことを祈り、別れを惜しんだ。
- ・ 推進80メートルを進む潜水艦内での狭いカイコ棚のような寝床での生活。途中で交戦があり肝をつぶしたが、出港して10日ぐらいたった頃、無事に別府湾に入港した。横須賀航空隊に向かうため、列車に乗り込み無心に眠り続けた。車内で戦地の話は厳禁。新聞をむさぼるように読んだ。
- ・ 結局、7月10日、基地航空隊の改編となり、トラック島の151航空隊が解隊された。トラック島から引き揚げてきた我々が主体となり、他の部隊からも合流して、国内の第141航空隊に配置された。既にあった偵察第三飛行隊に加えて、新しく偵察第四飛行隊が発足することになった。
- ・ 夏に南方の敵の動きが活発となり、141空が実戦配備されることになった。偵三(偵察第三飛行隊)は沖縄の小禄基地へ、偵四は鹿児島県の鹿屋基地へとそれぞれ飛行機5機で進出した。機種はすべて新型の「彗星偵察機」を使用した。
- ・ 10月10日、敵機動部隊が沖縄に接近し、島々に空襲をかけた。国内と台湾方面から多くの攻撃機が出撃し、偵四の「彗星」6機も出撃していった。このとき私は、第二次索敵の待機しつつ、偵

四のフィリピン進出の準備と、鹿屋航空隊の撤収準備に追われていた。その後、出撃した索敵機からの音信はなく、燃料切れの時間になっても姿を見せなかった。12名、5機すべてを失ってしまった。

## フィリピンへ進出

- ・ 1944(昭和19)年10月22日、偵四の「彗星」偵察機3機が台湾からフィリピンへとび、空襲の合間をぬって、マニラ市のニコルス飛行場に着陸した。10月にはいって敵軍はレイテ島攻略を開始し、18日にはフィリピン全島の日本軍に対して猛攻を開始していた。偵四は連日索敵機をとばし、フィリピン沖へ進出した米軍の索敵にあたっていた。

## 同期の特攻を見送る

- ・ 同じころ特別攻撃隊が編成され、連日出撃、6日間で空母4隻に被害を与えていた。ある日、空襲で街に避難していたとき、ある攻撃機の搭乗員から、九九式艦上爆撃機(九九艦爆)の特攻隊員に、同期生の伊藤立政君がいることを教えられた。「え ほんと」、その場に立ち尽くす思いだった。
- ・ マニラ市の宿舎に、特攻隊に同期生の伊藤立政君を尋ねた。「ヤアーヤアー、貴様まだ生きちよったか」と笑顔で迎えてくれた。彼の心を揺さぶったであろう特攻への心情は、見る限りでは全く感じられなかった。当時の搭乗員たちは、国に殉ずることは恐れないが、良い死に場所を望んでいた。10月29日、彼は第二神風特別攻撃隊神兵隊として東方洋上の敵に向い「我れ空母に突入す」と最後の無線を打電し、可愛いマスコットと共に大義に殉じた。

## 基地撤収、ルソン島北端のアパリへの転進

- ・ 昭和20年1月7日、敵がリングエン湾に上陸し、南下して来るとの情報に、基地撤収と陣地構築が下命され、更に残余の搭乗員に対し比島北端アパリへ向け敵中突破の転進命令が出た。翌朝、司令から飛行機受領の印鑑を渡され「部下を無事に台湾へ」と約束し、喚声が聳る中を数台の車と徒歩で出発。
- ・ 峠を越え河を渡り、ゲリラに遭遇して徒歩となり、野宿し、空腹と病に耐え、17日目に行程3百キロのツゲガラオ基地に着く。

## 特攻命令下る

- ・ 到着したその日、ツゲガラオ基地では特攻隊の編成が行われており、偵察隊から一名出せとの命令が下る。疲労と極限の異様な空気の中で時が流れていた。その時、親しくしていた先輩が「どんな命令でも、やるべき時は迷わず行け、それが軍人ぞ」というその声が聞こえてきた。死を恐れているのではないが、もっともっと敵地深く進入し偵察を続けたいという気持ちだった。ふと敵艦目がけて体当たりしていった多くの同期生のことが頭に浮かび、「よし、俺が行こう」と申し出た。
- ・ 1月25日、いざ出撃と「彗星」爆撃機に乗り組むが、零戦の一機が不調で出撃が一日延期となり、再び地上の人となった。その夜、敵の空襲で彗星に被弾、飛行が不能になってしまった。翌25日、第27金剛隊指揮官住野中尉の零戦2機がリングエンへ向け出撃。フィリピンからの最後の特攻出撃だった。

- ・ その後、偵四飛行隊は、内地に帰還することになった。配属先は、四国・愛媛県の松山基地の第343飛行隊である。松山に到着したとき、141空偵四が発足して約1年、その間の戦死者40名、搭乗員の7割を失った。

#### ⑦ 1945(昭和20)年 第343海軍航空隊で愛媛県・松山に(彩雲)

- ・ 1945(昭和20)年2月1日付で、フィリピン・ルソン島から引き揚げてきた我々は、第343海軍航空隊(源田実司令)の所属となり、「紫電改」戦闘機隊の偵察隊として発足した。われわれ偵察隊の任務は、「彩雲」の俊足を利用して、いち早く敵情を入手し、味方の戦闘機を有利な体勢に展開させることである。偵四は他部隊から搭乗員を迎え、士官12名、下士官・兵55名の大所帯になった。
- ・ 特攻隊の命令を解かれていない私は、宙に浮いた状態で2、3日過ごしたが落ち着かず、隊長へ申し出た。源田司令からの返答は速かった。「田中飛曹長にはやってもらいたいことがまだある。したがって君の特攻については当分私が預かる」

#### 第171海軍航空隊で鹿児島県・鹿屋に、沖縄方面の偵察

- ・ 1945(昭和20)年4月1、343空が第5航空艦隊の指揮下に入り、偵四の「彩雲」3機が鹿屋基地へ進出して、偵十一隊長の指揮を受けることになった。この日、米軍は沖縄に上陸を開始し、翌2日には北・中の両飛行場が占領された。4月6日早朝、鹿屋を出撃した「彩雲」が奄美大島の南方に敵機動隊を発見、これに対し九州方面から100機の特攻隊が出撃した。(第一次菊水作戦)
- ・ 5月1日、偵四は第171航空隊に編入され、鹿児島県鹿屋基地へ移動した。鹿屋に先行していた「彩雲」3機の姿はなかった。いずれの機も偵察戦果報告をしたあと、未帰還となっていた。
- ・ 8月15日、終戦の詔勅が放送された。若い搭乗員たちはこの玉音を信じようとしなかった。いならば興奮ぎみの部下たちに対して、上司の説得が延々と続いた。

以上